

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
大学院学生研究
2015 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 現代心理学研究科 映像身体学専攻		
研究代表者 (2016年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	立教大学大学院・現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士課程後期課程3年次	根本 裕道	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	現代心理学部・映像身体学科・教授	田崎 英明	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <u>人文</u> ・ 社会	個人・共同の別	<u>個人</u> ・ 共同 1名
研究課題	外への思考—文学における性の外と写真におけるイメージの外について		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2016年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士課程後期課程3年次	根本 裕道	
研究期間	2015 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

<外>というテーマのもとで文学や写真を論じることが本課題の目的であったが、実際には写真に重きをおいて研究は進められた。特にジョック・スタージスとフランチェスカ・ウッドマンという二人の写真家に焦点を当て、作品分析を<外>という問題意識のもので行った。写真とは身体の外に成立した視覚イメージであり、機械による知覚が産出するイメージである。機械による知覚と身体の知覚の出会いが写真を見るという経験を形作っている。そのため写真の内容や表象を分析するというよりも、機械による知覚と身体の知覚の差異から両者の写真を考察した。スタージスの写真にはドゥルーズ＝ガタリの「女性になること」を接続させ、生成変化とイメージの関連から写真を論じている。ウッドマンについては、アルトーが記した「私の内部の夜の身体」というモチーフから、ウッドマンの写真の中で実現する彼女の身体を考察し、検証した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[写真と知覚] [ジョック・スタージス] [フランチェスカ・ウッドマン]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では主に写真を対象とし、ジョック・スタージスとフランチェスカ・ウッドマンという二人の写真家に焦点を当てた。本研究のテーマは〈外〉というものであり、スタージスの作品においては有機的な知覚の〈外〉、男性的価値の〈外〉というかたちで研究の主題を考察していった。ウッドマンの写真においては、「内部の夜の身体」というモチーフからいわゆる通常の身体の〈外〉を見出していった。研究の成果としてスタージスの写真論は紀要に掲載された。ウッドマン論は執筆中のため未完成であるが、本研究から学術論文を一本生み出すことができたので、一定の成果があったと言える。ここでは特に成果のあがったスタージスの写真についての研究を以下で詳述する。

まずジョック・スタージスは主にフランスや北カリフォルニアのヌーディストビーチで撮影するアメリカの写真家である。彼の写真はしばしばヌードとして受容されているが、本研究は「彼の写真はヌードではない」という直感から始まる。写真とは身体の外に成立した視覚イメージであり、機械の知覚が産出するイメージである。写真を見ることはカメラが見たものを見ることであって、機械の知覚と身体の知覚の出会いが写真の経験を形作っている。そのため本研究では、写真の内容や表象を分析するというよりも、機械の知覚と身体の知覚の差異からスタージスの写真を考察することになった。考察の水準はイメージの産出、イメージの構成、イメージの知覚という三つである。機械による知覚がイメージを産出するが、イメージを構成するのは写真家である。機械の知覚を通して写真家は現実を一枚の写真へと変形する。その変形の写真的特性がフレームやフォーカス、露光時間などである。このような特性から彼の写真を分析し、彼が構成するイメージが通常の知覚の編成からいかにかけ離れているかを示すことが課題となった。そのためイメージの産出の原理やスタージスのイメージの構成を踏まえた上で「裸であること」の意味や価値を再考することになった。また、「女性になること」が意味や価値の変形であることを指摘し、裸(ヌード)をめぐる言説が知覚の問題とも切り離しえないことが導き出された。

①イメージの産出

まず写真とは光の痕跡である。カメラは光の充満であるこの世界から一定の光を制限し、差し引くことでイメージを成立させている。光を差し引くという点では人間の身体の知覚も同じであるが、この差し引き方には違いがあり、これが身体とカメラを隔てる本質的な差異である。写真とは身体の外に成立したイメージであり、カメラは身体の外にある知覚である。こうした性質を異にする二つの知覚が写真を見るという経験を形作っている。本研究はまずこの事実を出発点とした。身体が介在しないでイメージが成立するという意味で、写真のイメージは非有機的である。それに対して肉眼は有機的である。身体は生き、行動するのであるから、知覚はそれに沿って行われる。例えば、肉眼が裸を知覚するとき、その裸は身体の有機性の枠内で知覚される。裸体をただのモノとして見ることは難しい。身体が働きかけうるものとして知覚せざるをえない。肉眼が知覚する裸のイメージは、身体独自の基準にそって成立し、身体の有機的な編成のもとで引き出されてくるイメージである。しかし、カメラは身体をもたないにもかかわらずイメージを産出する。〈機械による知覚〉という表現が成り立つのはこの意味においてである。身体の知覚は行動と関連して行われるのであるから、その知覚のイメージは行動との関連において有機的に圧縮されたイメージである。これが「知覚の有機性」や「有機的イメージ」という表現で使われる「有機的」という言葉の内実である。それに対して機械の知覚が生み出すイメージは「非有機的」である。カメラは行動とは無関係にイメージを引き出すのであるから、そのイメージは有機的なイメージと本質において異なっている。たとえそれが同じ時間の幅が圧縮されたものであったとしても、決して混同されることのない差異がそこにはある。非有機的な仕方で結実するイメージは、身体が知覚するイメージとは別の実在性をもっている。これがイメージの産出の次元における身体とカメラの差異であり、身体の〈外〉としての写真の非有機的な経験である。

研究成果の概要 つづき**② イメージの構成**

イメージの産出という次元から機械の知覚の本性を考えれば、写真とは原理的に裸である。しかしひとつのイメージは機械による産出であると同時に、写真家によって構成されるものである。写真家が機械の知覚をどのように捉え、機能させたかがイメージの構成の次元に反映される。機械の知覚と身体の知覚の間にある差異を度合いの差異として捉えるのであれば、身体の知覚に寄り添うようなイメージが構成され、イメージは有機的な編成に回収される。それとは反対に、本性の差異として捉えるのであれば、機械の知覚の力能を最大限発揮させる方向でイメージは構成される。機械の知覚の本性はどこまでいっても非有機的であるのだから、肉眼によるイメージと決して混同されえない。しかしそれを有機性において囲み込むのは身体の側なのである。機械が産出したイメージがいかにも裸であり、いかにも非有機的であっても、身体は自身の有機的な編成にそのイメージを吸収してしまう。有機性に抵抗するようなイメージを探求することは、「見ること」の変様を促すイメージを探求することでもある。このとき写真家が「裸にする」のはイメージでもあれば身体の知覚でもある。本研究ではそのような写真を撮り続ける写真家の一人としてジョック・スタージスを位置づけた。彼はイメージを裸にし、身体の知覚も裸にする。そのため彼の写真には「別様に見ること」が発生する要素が含まれている。むしろそれを強いるイメージである。彼の写真は身体的な有機性に従属しない無機質な裸の写真をおさめていると考えられるので、それは単なる裸ではなく、実現するのはく非有機的な裸>なのである。ここに本研究を貫く裸の意味の二重性がある。このことはさらにイメージの知覚という次元においても考察した。

③ イメージの知覚

この次元では「写真を見ること」という意味での知覚を考察した。写真の特性のひとつであるフレームは非有機的なイメージが成立する条件でもあり、写真家が画を構成するときの選択や決断の境界でもある。身体の知覚にはフレームはないが、行動の必要に応じて見るべきものや見方を変化させている。身体の知覚の境界は、当の身体のなしうることに応じて変動する。しかし写真のフレームは「見えるもの」と「見えないもの」の境界を、画の内部と外部を明確に画定させる。写真にとって、こうしたフレームは必須の要件である。スタージスの写真の多くでは、フレームは画の内側へと向けて作用し、画の内部を緊張させている。フレームによって世界から切り離されたイメージは、画のうちに緊張の度合いが最も高まる中心を作り出す。それが被写体の身体である。フレームは身体を囲い込み、見るべきものとして強調している。このとき着目したのが被写体の体毛である。スタージスの写真に写る人物たちには体毛、産毛がはっきりと見て取れる。意図なしにそれらの毛が画に写り込む。彼は 8×10 の大判カメラを使用することで、身体の細部まで捉えようとする。大判カメラは細部を写すことができると同時に、過剰なまでに細部を写し過ぎてしまうということも意味する。精密な細部描写は通常知覚の態勢における「見えるもの」と「見えないもの」の境界を変動させてしまう。スタージスの写真における産毛は、作家の作画上の強調というよりは、描くか描かないかという選択にかかわらず、そこに在るものとして写真に写る。また、産毛に限らなくても、身体に付着している水滴のひとつひとつ、水に濡れた身体の鳥肌のひとつひとつが鮮明に写っており、身体の細部が否応なく露出している。こうした細部は、感覚しているにもかかわらず知覚していない。「知覚することのできないもの」と同時に、写真においては「知覚することしかできないもの」、「知覚されるべきもの」として在る。身体知覚の中心から外れたものが、写真においては等しく写り込んでいる。フレームやフォーカスという特性が連動し、スタージスの写真では普段は知覚しえぬ身体の細部がまざまざと確認される。こうした「知覚されるべきもの」を本研究ではく外>と呼んだ。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

根本裕道「ジョック・スタージスの写真について——イメージと女性になること」、『立教映像身体学研究』第4号、2016年、35-58頁。

② 該当なし

③ 該当なし

④ 該当なし